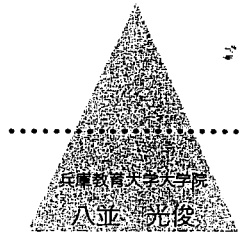


チームサポートの
理論と実際

新連載

【第1回】

チーム援助の目的と特色



私のチーム援助は、アメリカのスクールカウンセリングで実践されているSST（ステューデント・サポートチーム）と日本の学校心理学におけるチーム援助理論や実践を基盤にしています。また、私は中学校段階の不登校生徒に対して、現実の学校現場をフィールドに長年研究を行ってきました。その研究成果を踏まえて、チーム援助の目的や特色、学校での具体的な展開方法や過程、チーム援助の教育効果などをお話ししながら、生徒指導におけるチーム援助の実践性や応用可能性について考えていきたいと思います。

1 チーム援助の必要性

まず、チーム援助の学校現場における必要性について考

の生徒指導体制をどのように確立するかということにあると考えられます。生徒の危機の要因が複雑であるために、もはや一人の学級担任教師やホームルーム担当教師では対応しえない状況にあるということです。

平成7年度から開始された文部（科学）省のスクールカウンセラー活用事業は、その点を如実に示しています。中学校段階でのスクールカウンセラー配置については、特に教育相談において効果を上げることが報告されています。

しかし他方では、スクールカウンセラーの生の声として、一部の教職員の生徒理解の仕方とカウンセラーとの大きなギャップにとまどいと無能感を持つ、「学校側に「スクールカウンセラーをどう活用するか」ということを考える気がない」、「担任が生徒の問題を抱え込んでいる」など教師との連携の困難性が指摘されています（千葉県総合教育センター「学校における教育相談体制の在り方に関する研究」研究報告第346号、2001年）。

今後のスクールカウンセラーを組み込んだ機能的な生徒指導体制を想定した場合、非常に深刻な生徒指導の問題に対しては、教育の専門家である教師同士が、あるいは教師と心理臨床の専門家であるスクールカウンセラーが保護者とパートナーシップを築き、お互いの専門性を十分に活用しながらチームを組んで早期に解決していくのが望ましい

えてみましょう。生徒指導に目を向けると、児童生徒（以下、「生徒」と総称します）は、多様な問題を抱え危機的状況に直面しているといえます。

たとえば、基本的な生活習慣の未定着、脈絡のない怒りや暴力、学習意欲の低下、学習遅滞やLD、テスト不安、いじめ、不登校、校内暴力、高校中退、摂食障害、離婚や虐待、セクシャルハラスメント、薬物乱用、自殺、性非行や10代の妊娠、トラウマ、目的意識の低い進路選択・決定などの危機があります。

山積する生徒指導上の問題のいずれから着手し、どのような方法によって問題解決を図るのかは、きわめて難しいことです。しかし、これらの問題提起に関する共通点は、危機に陥った特別な援助ニーズをもつ生徒に対する学校内

と考えます。

2 チーム援助の目的

次に、チーム援助の目的を筑波大学の石隈先生の「学校心理学」からみてみましょう。

チーム援助の目的は、複数の専門家と保護者が協力して、生徒の学習面、心理・社会面、進路面、健康面における問題状況の解決を図ることにあります。チーム援助は、登校を渋り始めた生徒、学習意欲が低下し始めた生徒などへの2次の援助サービスから、長期欠席、LDの生徒への3次の援助サービスが必要とする生徒に対して有効な援助方法だといえます（石隈利紀「学校心理学」誠信書房、1999年）。

ここで2次的・3次的援助サービスという言葉を用いました。学校心理学では、生徒への援助サービスを大きく3つに区分します。①すべての生徒に対する1次的援助サービス。たとえば入学時の進路ガイダンスや仲間づくりによる対人関係スキルの向上などはその典型です。②一部の生徒に対する2次的援助サービス。登校渋りや学習意欲の低下など生徒指導上の問題が表面化し始めた場合に、それ以上深みに落ち込まないように予防的な援助サービスを行います。③特定の生徒に対する3次的援助サービス。長期欠

席、いじめ、非行などの深刻な問題を抱えた生徒への特別な援助を個別に行います。

このように1次・2次・3次となるに従って、生徒の問題性は高くなり、より高度な専門性を必要とする援助サービスが展開されます。

3 チーム援助の特色

以上、簡単ですが生徒指導におけるチーム援助の必要性と目的についてお話ししました。

以下では、チーム援助全般にかかわる特色と私のチーム援助の特色について述べてみたいと思います。チーム援助全般にかかわる特色としては、次の2点があげられます。

① 個別的・発達の・総合的な援助サービス

チーム援助の目的からおわかりのように、対象となる生徒は少人数であり、チーム援助は彼らの個別的な援助ニーズに応えるものです。チーム援助は、生徒が学校生活で遭遇する諸問題、別の言い方をすれば、発達のプロセスにおいて出会う生徒の学習面・心理・社会面・進路面・健康面の諸問題の解決を図ります。

したがって、問題解決の突破口は、心理的ケアという心理面からだけでなく、学習面や進路面など多様だという

③ 短期的な問題解決型の援助サービス

チーム援助の全般にも共通しますが、チーム援助は具体的に生徒の問題をどのように解決するかという問題解決型の援助サービスであるといえます。

これに加えて、私個人は学校には就学年限がありますから、やはり学期や1年という短いスパンでの問題の改善や解決をめざしますが、生徒・保護者・教師にとって望ましいと考えます。とりわけ教師側には、校務分掌の交代や人事異動という、1年以上の長期間で考えるとチーム援助を交質させる可能性のある要因があります。

④ データベースによるモニタリングシステム

私のチーム援助の最大の特色は、生徒の援助プロセスをモニタリングし、そのモニタリング情報に基づいてチーム援助会議を開催し、援助サービスの質の向上と効率化を図るという点にあります。その核となるのが、チーム援助データベースです(拙稿、本誌2002年3月号、2003年1月号)。

日々の援助記録をチーム援助データベースにデジタル情報として蓄積することによって、援助日別・援助領域別・援助者別などの条件を単独指定、もしくは複数同時指定して高速かつ柔軟な検索を瞬時に行うことができます。これ

ことです。また、問題解決だけでなく、生徒の夢や希望の実現に向けて援助サービスを展開します。したがって、チーム援助は、個別的・発達の・総合的であるといえます。

② 組織的・計画的な援助サービス

チーム援助では、生徒の援助ニーズに応じて、保護者、学級担任教師、生徒指導主事・学年生徒指導担当教師、進路指導主事・学年進路指導担当教師、教育相談担当教師、教科担当教師、養護教諭、部活担当教師、スクールカウンセラー、学外の専門機関の専門家がチームとなり、日常の行動観察、授業観察、教育相談記録、学習成績、心理テストなどから、子どものアセスメント(情報収集・分析)を行い、問題点を洗い出して援助目標を設定し、「何を目標に、いつ、誰が、どの場面で、どういう方法で、いつまで援助するのか」という点について援助シートを作成し、個別教育計画に基づいてチーム援助を展開します。また、チーム援助の教育効果に関する総括的評価を、学期末や学年末に行い、次期の援助に活用します。

このようにチーム援助は、非常に組織的・計画的であるといえます。

次に、従来のチーム援助実践・研究とは異なる私のチーム援助の特色としては、以下の3点があげられます。

によって、複眼的に生徒をモニタリングすると同時に、チーム援助の振り返りが可能となります。

また、生徒の個人的プライバシーを保護できる強力なセキュリティをもっています。

⑤ デジタル文書によるファイリングシステム

もう一つの私のチーム援助の特色は、先ほどの援助プロセスのデジタル情報化と並んで、チーム援助会議録をデジタル文書化し、ファイリングするところにあります。

従来の会議録は紙ベースでの記録がほとんどだといえます。これでは記録量が増加した場合に、容易に検索できないばかりか、劣化や紛失、情報漏洩の可能性がります。そこで、チーム会議録をデジタル文書化し、セキュリティを施し、編集・検索・保存を容易にしています。

いわばこの生徒の「電子カルテ」は、生徒のアセスメント(情報収集・分析)、保護者へのインフォームドコメント(説明・同意)、生徒・保護者・社会に対するアカウンタビリティ(説明責任)など、チーム援助過程のすべての局面において活用されます。

チームサポートの
理論と実際

【第2回】

チーム援助のプロセスモデル

兵庫教育大学大学院助教授
八並 光俊

第1回では、アメリカのSSTや日本の学校心理学を踏まえたチーム援助の特色について述べました。今回は、チーム援助のための生徒指導体制とは、どのようなものなのかを考えてみたいと思います。少し形式ばった言い方をすれば、効果的なチーム援助を展開していく際的前提条件とプロセスモデルの提示となります。

1 チーム援助の前提条件

① チーム援助の定義と目的の明確化

すべての教育援助サービスは、生徒・保護者や私たち教師にとって必要であるからこそ行うわけです。必要性のないところに、情熱や組織としての求心力は生まれません。自明なことのようにですが、学校現場ではややもすると多忙

なあまり「実践のやりやすさ」という方法論に目を奪われて、「何のために(目的)、誰を対象に(対象)、どのような方法で実践し(方法)、どのような成果を狙うのか(結果)」という基本を見落としがちです。チーム援助とはどのようなものであり、学校の実態に照らしてどのような生徒の問題を解決していけるようなのか、生徒指導主任がコーディネーター(調整役・パイプ役)となつて、生徒指導部会・生徒指導委員会・学年会あるいは職員会議や校内研修を通して、全教師が共通理解を深めておくことが大切です。

② チーム援助の対象と選定基準の明確化

チーム援助を実践する場合に避けて通れないのが、誰に対してチーム援助を行うのかという対象の問題があります。

もっと簡単に言うと、生徒のどのような問題を解決するかということをはつきりさせておく必要があります。なぜならチーム援助は、2次的・3次的教育援助サービスの一つの方法論であるため、当然少数の生徒しか対象にできないからです。私の場合は中学校の不登校生徒の問題解決をめざしていますので、たとえば月平均の欠席日数が14日を超える不登校傾向の強い生徒、または不登校に陥っている生徒を対象にしてみました。チーム援助の対象となる生徒の選定基準(プライオリティ)に関して、十分に議論しておく必要があります。

校の実態に応じたチーム編成や援助の在り方を考慮しなければなりません。

2 チーム援助のプロセスユニット

チーム援助プロセスの基本単位を、ここではプロセスユニットと名づけます。プロセスユニットモデルは、図1に示すとおりです。モデルですので、アルファベットの大字で構成要素やサポートツールを代表させています。

プロセスユニットは、チーム援助プロセスの4つの要素(アセスメント(A)、個別援助計画(P)、チーム援助実践(I)、チーム援助評価(E))、チーム援助を計画的・効果的に展開するための2つのツール(チーム援助シート(S)、チーム援助データベース(D))、それとチーム援助プロセス全体から生じる成果(チーム援助効果(R))から構成されます。それぞれについて、以下で概略を述べてみたいと思います。



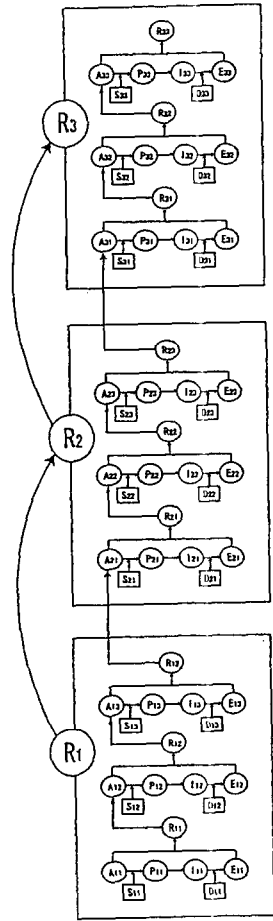
③ 学校内外の資源の確認と実現可能性の吟味

チーム援助の実現可能性は、次のような学校内外の資源(リソース)によって影響を受けます。たとえば、教職員数の多少、生徒指導主任・進路指導主任・教育相談担当などキャリアを積んだ教師数の多少、スクールカウンセラーや相談員の有無、カウンセリング研修を受けた教師数、各学会認定のカウンセラー資格を有する教師がいるかなどの教師の専門性の高低、その他適応指導教室・教育センター・大学・専門機関・教育委員会との連携の程度などがあげられます。また、生徒指導部に教育相談係が含まれている、あるいは教育相談部が独立しているなどの校務分掌組織の違いもチーム援助の実践に影響を与えます。このような学

① アセスメント(A—Assessment)

生徒指導上の問題を抱えた生徒に対して、保護者、学級担任教師、生徒指導主任(学年の生徒指導担当教師)、進路指導主任、教育相談担当教師、学年主任、養護教諭、スクールカウンセラーなどが集まって、生徒の実態把握のための会議をもちます。生徒の出欠状況や学習成績の変化、

図2 チーム援助のプロセスモデル (八並光俊, 2003)



チーム援助は、生徒指導上の問題度の高い生徒を対象としていますので、短期間で劇的に問題解決される場合や複数学期や複数学年にわたる長期の場合などさまざまです。前者の場合、先ほどの述べたプロセスユニットの一つだけ

3 チーム援助のプロセスモデル

成ってきたのかという生徒評価と、教職員間のコミュニケーションや協働性の深化、援助方法の有効性などに関する教師評価の両者を含みます。「何がうまくいって、何がうまくいかなかったのか、その原因はどこにありそうで、それを改善するには今後どうしたらよいか」という成果と問題を明確にします。

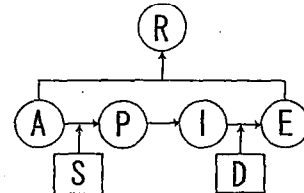
1学期間あるいは1年間を通して、チーム援助実践によって改善・解決されたこと (R-Resolution) を大切に、次期のチーム援助につなげていきます。



特に、チーム援助が複数学年にわたる場合は、異動に伴うスタッフの構成に変更が生じる可能性が高いため、チーム援助データベースやチーム援助会議録などによる過年度のチーム援助情報の共有化が重要となります。

で完結します。後者の場合は、複数のプロセスユニットが連結しながら展開すると考えるのがよいでしょう。つまり、図2のようなプロセスユニットの連鎖構造によって、生徒の問題解決を行います。図2のチーム援助プロセスモデルは、例として中学校における3年間のチーム援助を想定しています。R₁は、1年時のチーム援助を示しています。また、R₁の左の添え字は1年を示し、右の添え字は1学期を示しています。むろん、チーム援助の開始時期や終了時期にはばらつきがありますが、理念的にはチーム援助がこのようにシステマチックかつ継続的に展開されるのだと理解していただければと思います。

図1 チーム援助のプロセスユニット (八並光俊, 2003)



A-Assessment	アセスメント
P-Planning	個別援助計画
I-Implementation	チーム援助実践
E-Evaluation	チーム援助評価
R-Resolution	チーム援助効果
S-Sheet	チーム援助シート
D-Database	チーム援助データベース

授業場面・部活動場面での観察から得られた情報、学級担任や教育相談担当教師の教育相談から得られた情報、養護教諭の心身面についての情報、学校内外の友人から得られた情報、保護者から得られた家庭内情報、あるいは学校で実施した心理テストや独自の調査結果などの各種情報から客観的・共感的理解を図ります。このアセスメントから生徒の実態把握を行い、問題を特定化し、学校内での問題解決の可能性や学校外の専門機関との連携の必要性などの見通しをつけます。

② 個別援助計画 (Planning)
アセスメントから生徒の問題解決に向けて、具体的な援助目標を設定します。不登校傾向の中学生を例にすると、「欠席による進路不安の軽減」というよ



うな援助目標を設定します。この際に、チーム援助シート (Sheet) を活用し、学習面・心理・社会面・進路面、健康面の各側面から問題を整理し、具体的な個別援助計画を作成します。つまり、「何を目標に、いつ、誰が、どの場面、どのような方法で、いつまで援助を行うか」という点について、チーム援助シートを作成します。

③ チーム援助の実践 (Implementation)

チーム援助シートにしたがって、チーム援助を実践します。チーム援助では、定期的にチーム援助会議を開催し、生徒のモニタリング (状態把握) を行い、援助効果の確認や援助方法の微調整を行います。チーム援助会議が独立して定期的に行われるのが望ましいのですが、現実的には定期に開催される生徒指導部会や学年会を活用しながら、生徒のモニタリングを行います。私の場合、チーム援助の記録は、すべてチーム援助データベース (Database) に逐次記録し、チーム援助会議のときに必要なデータをデータベースから検索・抽出して、デジタル会議録を作成・蓄積します。

④ チーム援助の評価 (Evaluation)

学期末や学年末に、これまで実践したチーム援助の評価を行います。この評価には、生徒の問題解決がどの程度達

【第3回】

チーム援助データベースの概観

兵庫教育大学大学院助教授
八並 光俊

1 チーム援助データベースの重要性

今回と次回は、私のチーム援助の特色であるチーム援助データベースシステムについてお話ししたいと思います。4月号では、「私のチーム援助の最大の特徴は、生徒の援助プロセスをモニタリングし、そのモニタリング情報に基づいてチーム援助会議を開催し、援助サービスの質の向上と効率化を図るという点にあります。」と述べました。

また、5月号では、「チーム援助プロセスモデルの説明部分で、チーム援助を計画的・効果的に展開するためのツールとして「チーム援助データベース(D)」があるとも述べました。

では、なぜ私は、チーム援助データベースにこだわっているのでしょうか。それは私が、チーム援助実践の成否は、いかに対象となった生徒の生徒指導情報を援助スタッフが共有できるかにかかっていると考えるからです。

チーム援助では、1人の教師による援助の限界を複数の教師・保護者・スクールカウンセラーなどとの協働によって突破しようと試みます。しかし、そこで誤解してはならないのは、皆でやれば何かできるということではなく、個々のスタッフが対象生徒の状態についての認識をし、自己の役割を遂行するという点にあります。

たとえば、非常勤のスクールカウンセラーに、勤務日以外の私たち教師の援助経過が知らされない場合、適切なカウンセリングが行えるでしょうか。あるいは、公立学校で

は教師の異動によるチーム改変という不可避の圧力が常に働いています。そのような場合においても、整理されたチーム援助情報の蓄積によって、新規スタッフが過年度の生徒へのチーム援助がどのようになされてきたかを容易に理解することができるでしょう。

チーム援助情報の実践的重要性は高いのですが、その収集方法、整理・分類方法、活用方法、管理方法に関しては十分な議論や研究がなされていません。

たとえば、チーム援助情報は、特性上生徒および保護者のプライバシーという点からきわめて機密性の高い情報です。チーム援助情報をどのような方法や媒体で、どのように共有化し、どこに保存するのか、いつ廃棄するのかなどの情報セキュリティや保存に関しては今後の研究・開発課題だといえます。

私のチーム援助データベースは、このようなチーム援助の研究・実践面での課題に応えようとするものです。

2 チーム援助データベースの概要

では、チーム援助データベース(以下、データベースと略記)について、概要を述べたいと思います。データベースには、「いつ、誰が、どこで、誰に対して、どの援助領域について、どのような援助を実践し、それに対してどの

ように生徒がリアクションを取ったのか」という基本情報が蓄積されます。そこから、必要な情報を多様な検索条件により瞬時に抽出することが可能です。また、非常に強固なセキュリティが施されています。以下、データベースの特色や構造について簡単に述べます。

① 商用ソフトの活用

データベースは、世界的に定評のある日本オラクル社製のWindows版Oracle(以下、オラクルと表記)のPersonal Editionを採用しています。商用データベースソフトであるオラクルを選択した理由は、大きく4つあります。

第一に、オラクルが処理可能なデータ量は巨大であり、なおかつ処理速度が非常に高速だということです。また、数値・日付だけでなく日本語処理能力が強力です。援助記録は、比較的長い日本語の文章で入力・保存されるため、日本語処理能力は、どのようなデータベースソフトを採用するのかがポイントになります。

第二に、データベースの構築、データの検索・挿入・更新・削除などの基本的操作は、データベースの標準的言語であるSQL(構造化問い合わせ言語)を使用して、柔軟に行うことができます。データベースの基本的な学習は、短期間の校内研修によって簡単に修得可能です。

図1

```
A: データベースで援助情報を検索するためのファイル (target.sql)
1 SELECT s_date 援助日, s_time 援助時間, s_place 援助場所, supporter 援助者,
2 aspect 援助領域, judge 援助効果, support 援助内容, reaction 応答行為
3 FROM sst_db
4 WHERE (target='兵庫太郎' AND aspect='進路')
5 AND s_date BETWEEN '2001-12-1' AND '2001-12-20'
6 ORDER BY s_date ASC;
```

図2

B: データベースによる検索結果の画面表示

```
SQL> @target
```

援助日	援助時間	援助場所	援助者	援助領域	援助効果
援助内容		応答行為			
01-12-04	放課後	パソコン教室	神戸花子	進路 4	
○放課後にインターネットを使用して高校調べを行った。進学可能性はともあれ、どう いう高校があり、その高校がどのようなコースをもっているか興味づけしてみた。 ●進路については、やはり気になるらしく、時間の経過とともに自分からこの高校とは指 示するようになった。また、資格についても、時間の許す限り調べてみた。					
01-12-13	昼休み	職員室	六甲一朗	進路 1	
○進路に関する保護者面談を予定しており、その申し込み書を忘れたという連絡を担任より 受けた。そこで、家庭ではどのような話になっているか聞いてみた。お母さんに私あ での電話連絡を依頼した。 ●本人の話では、自分がわからないのに、親に口出しをされるのはゴメンだという気持ち が強いとのことだった。保護者も進路の選択決定については情報不足であり、あえて口 にしない雰囲気をもってほしい。					

図2は、オラクルのツールを利用して、検索させた画面です。データは、架空データです。数千件のデータがあっても簡単に検索を実行できます。今回は、実際に使用したデータベースについて、もう少し詳しくお話ししたいと思います。

部会等での資料作成は、このデータベースを最大限に活用します。生徒への援助情報を得る場合は、先ほどのすべての情報を活用することもできますし、必要とする情報だけを指定して活用することもできます。

③ 援助データ検索の実際
データベースから援助情報を検索するには、図1のような検索用のファイルを作成します。一見すると難しくそうですが、SQLでの書式を理解すれば誰でも簡単に作成できます。なお、説明の都合上、左端に行番号をつけています。このファイルでは、1行目から2行目で表示させたい列名を指定し、3行目は検索対象となるデータベース名、4行目から5行目では対象の生徒と援助領域並びに援助期間を指定しています。6行目は、援助日の古い順に並べるように指定しています。

② データベースの基本構造
オラクルは、現在主流となっているリレーショナルデータベースと呼ばれるデータベースソフトの種類に属します。私のデータベースも、この点を生かして開発をしています。今回はその点に触れませんが、データベースの概観だけをつかんでください。次回に、データベースの詳細について説明します。データベースに蓄積される援助データは、基本的には、表1のとおりです。

単に付加することも可能です。整理番号以外の列から記録する情報は、「援助が、いつ、どこで行われたのか」「スタッフの誰が、どのような役割を担っているのか」「援助対象となった生徒は誰であり、その生徒の出欠状況はどうだったのか」「援助領域は何で、援助時の効果は援助者の自己評価で何点くらいであったのか」「具体的にどのような援助を行ったのか、またそれに対して生徒はどのような応答行為を示したのか」ということがわかると思います。

また、表中の列名・日本語列名は、実際に検索を行う場合に使用します。列内容には、簡単に列の内容を示しています。ごらんのように、データベースに全部で12の情報があります。整理番号という形式的な情報を除けば、実質11の情報が記録されるということになります。この11の情報



表1

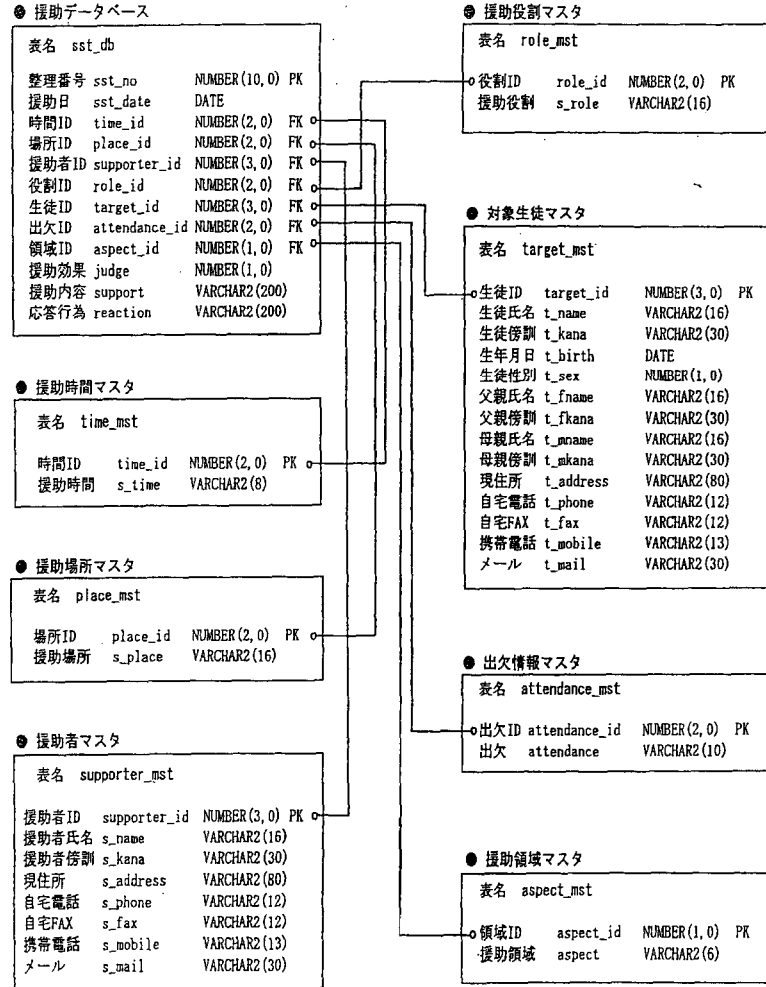
○データベース名⇒sst_db

No	列名	日本語列名	列内容
1	s_no	整理番号	整理番号
2	s_date	援助日	援助実施日
3	s_time	援助時間	援助の時間帯
4	s_place	援助場所	援助した場所
5	supporter	援助者	援助者の氏名
6	s_role	援助役割	援助者の役割
7	target	生徒氏名	生徒の氏名
8	attendance	出欠状況	生徒の出欠状況
9	aspect	援助領域	援助領域
10	judge	援助効果	援助効果の判定
11	support	援助内容	援助内容の要約
12	reaction	応答行為	応答行為の要約

(八並光俊,2003)

を駆使して、さまざまな検索や加工を行うことができ、各学校で自校の実態や援助方針に応じて蓄積する情報をつけ加えた場合は、簡

＜図1＞ データベースの構造



(八並光俊, 2003)

チームサポートの理論と実際

【第4回】

チーム援助データベースの実際

兵庫教育大学大学院助教授
八並 光俊

1 チーム援助データベースの構造

前回、チーム援助データベース(以下、データベースと略記)について概観しました。今回は、実際にデータベースがどのようなものであるのか、コア(中心)部分の構造を少し説明したいと思います。実際に使用するデータベースは、次ページのA図1Vのような構造をもっています。

オラクル(Oracle)は、リレーショナルデータベースという種類のソフトです。その特性を生かして、sst_dbという表(データベース)を中心に、7つの表が関連づけられています。この8つの表を駆使して、多様な検索が行われます。四角枠内の右から2列目は、データの種類を示しています。たとえば、DATEは日付型、VARCHAR2は文字型、NUMBERは数値型のデータです。また、()内の数値は全

体の桁数、並びに小数点以下の桁数を示しています。さらに右端列のPKは、リレーショナルデータベースにおいて、主キーと呼ばれるものです。同様に、FKは、外部キーと呼ばれるものです。これらはデータベースを操作する際に重要となるものです。次に、各表の構成やデータ入力の方法について簡単に説明します。

① 援助データベース (sst_db)

データベースの中心となる表です。「いつ(援助日・時間ID)、どこで(場所ID)、誰が(援助者ID・役割ID)、誰に対して(生徒ID・出欠ID)、どのような援助を行い(領域ID・援助効果・援助内容)、それに対してどのように生徒が応答したのか(応答行為)」という基本情報を記録していきます。

この表の各列で特徴的な点は、援助効果 (judge) にお

は早速別教室として11のコードを入力する。出欠(attendance)には、遅刻や無断欠席など該当する出欠カテゴリ名を入力します。

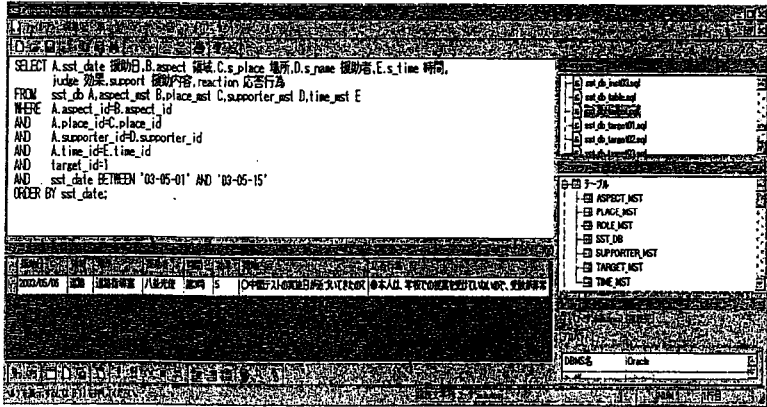
⑧ 援助領域マスタ (aspect_mst)
領域ID (aspect_id) は、学習面に1、心理・社会面に2、進路面に3、健康面に4のコードを割り当てます。援助領域 (aspect) には、コードに対応した学習・心社・進路・健康のカテゴリ名を入力します。

2 チーム援助データベースによる検索性

先程の8つの表を駆使して、必要な援助情報をデータベースから取得します。A図2Vは、フリーのSQL開発ソフトを使用して、グラフィカルな環境でさまざまな検索作業を行っている例です。画面の上段の大きな長方形枠に検索のためのスク립トを書きます。それを実行すると、同時に画面下段の長方形枠に検索結果が表示されます。検索結果を編集・加工し、チーム会議に活用します。データベースの操作ツールとしては、オラクルに同梱されているSQL*PLUSも多用します。なお、図で使用しているソフトは、じみきソフトウェアがフリーで提供しているCommon SQL Environment (Ver.1.5.9) という高機能なツールです (<http://www.hi-ho.ne.jp/suniki/>)。

今回は、アクセスメントについて、話を進めたいと思います。

<図2> SQL開発ソフトを使用した検索性



■生徒指導講座 HP: <http://www.ebuhyogo-u.ac.jp/shido/index.html>

■八並光俊 HP: <http://www.ebuhyogo-u.ac.jp/shido/yatunami/index.html>

いては、生徒への援助行為がどの程度効果的であったのか、援助者が4段階で主観的に判定します。具体的には、「効果的でなかった」に1点、「まあまあ効果的であった」に2点、「効果的であった」に3点、「非常に効果的であった」に4点を与え、評価点と対応するコード1〜4のいずれかを数値で記入します。援助内容 (support) と応答行為 (reaction) は、前者が教師の援助内容で、後者がそれに対する生徒の応答行為であり、具体的にどのような根拠に基づき指示・助言・援助を行い、それに対して生徒がどのような言動を取ったのかを記入します。ただし、全角で100文字以内という制限をつけています。

② 援助時間マスタ (time_mst)
時間ID (time_id) は、始業前に1、1時間目の授業に10、1時間目の休憩時間に11、2時間目の授業に20、2時間目の休憩時間21と順次コードを入力します。援助時間 (time) には、始業前・第1時・第1時休・放課後などの時間カテゴリ名を入力します。

③ 援助場所マスタ (place_mst)
場所ID (place_id) は、教室に1、職員室に2、教育相談室に3、進路指導室に4、保健室に5、別教室に6とコードを入力し、援助場所 (place) には教室など該当する場所カテゴリ名を入力します。

④ 援助者マスタ (supporter_mst)
援助者ID (supporter_id) では、教師やスクールカウンセラーに1から2・3と連続するコードを入力します。



援助者名 (sname) には、教師やスクールカウンセラーの氏名を、援助者傍訓 (s kana) にはよみがなを、以下、住所からメールアドレスまでを入力します。

⑤ 援助役割マスタ (role_mst)
役割ID (role_id) は、学級担任に1、生徒指導主事に2、学年生徒指導担当に3、教育相談担当に4、進路指導主事に5、学年主任に6、養護教諭に7、スクールカウンセラーに8とコードを入力します。援助役割 (role) には、学級担任や生徒指導主事など該当する役割カテゴリ名を入力します。

⑥ 対象生徒マスタ (target_mst)
生徒ID (target_id) では、対象生徒に1から連番を振って区別します。以下、生徒の氏名、よみがな、生年月日、保護者に関する情報等を入力します。

⑦ 出欠情報マスタ (attendance_mst)
出欠ID (attendance_id) は、遅刻に1、無断欠席に2、事前連絡による連絡欠席に3、終日教室での学習等が行えた場合は終日教室として4、教室での学習等はしていたが早退をした場合は早退教室として5、終日保健室での学習等が行えた場合は終日保健室として6、保健室での学習等が行えた場合は終日保健室として7、終日相談室での学習等が行えた場合は終日相談室として8、相談室での学習等が行えた場合は早退相談室として9、終日別教室での学習等が行えた場合は終日別教室として10、別教室での学習等が行えた場合は早退をした場合

チームサポートの理論と実際

【第5回】

効果的なアセスメントへの準備

兵庫教育大学大学院助教授
八並 光俊

1 生徒理解のための日常業務の重要性

今回から、チーム援助の具体的な展開過程について述べていきたいと思います。チーム援助プロセスの第1段階は、アセスメントということでした。アセスメントは、対象となる生徒の過去や現在の動静把握からの生徒理解だといえます。

教育的・心理的・医療的な査定に基づいて、個別援助計画が策定されるわけですから、その意味からするとチーム援助の成否を握る重要な段階ともいえます。多忙な学校実践のなかで、よりの確かなアセスメントを実施するには何が必要なのでしょう。

第1回でお話ししたように、私のチーム援助は、短期解決志向型のチーム援助実践であるということです。それを

達成するには、アセスメント段階からいろいろと工夫をすることが必要となります。少なくとも、私は次の2つの点が重要であると思っています。

① 「予防・早期発見・介入」という基本姿勢

昨年末に、文部科学省の特別研究でカリフォルニア州の不登校調査に参りました。そのとき、不登校生徒への対応に関するハンドブックに、「予防・早期発見・介入」(Prevention, Early Identification and Intervention)と書かれてありました。私は、学校実践でのチーム援助はこれだと共感しました。

対象となる生徒の生徒指導上の問題は重く複雑です。しかし、彼らがより深みに落ち込まないような早期解決に向けての努力と工夫が必要です。現状の学校教育では、臨床心理士・認定カウンセラー・学校心理士等の有資格教師は、

ごく一部です。大多数の教師は、心理臨床のプロではありません。また、非常勤のスクールカウンセラーは、心理臨床のプロであっても、学校教育のプロではないという現実があります。

このような状況下で、チーム援助を適切に展開しようとすると、大きな困難が立ちはたかかります。チーム援助の実践的課題に伴うリスクを少しでも低くするには、教師が平素の業務において、予防的・早期発見的な意味合いを考慮しながら、多角的な視点から生徒理解を行い、それを積み上げていくことが大切だと思います。言い換えれば、両者の欠点を補完し、なおかつアセスメントに役立つ情報収集が重要だということです。

② デジタルポートフォリオによる生徒理解

日常の生徒理解を向上させるツールとして、デジタルポートフォリオ(電子紙ばさみ)の作成を推奨します。生徒の学習成果や作品、行事での写真等の記録を、デジタルカメラやスキャナーを利用してファイリングします。多忙を極める学校現場において、各種の文字ベースの記録は過重な負担を招きます。また、記録の書式が統一されていないと、あまりにも断片的・主観的で役に立ちません。それに対して、生徒の事実を画像データとして記録し、蓄積していくことによって、記録をさかのぼる、分類する、比較するなどの複眼的分析を視覚的に行えます。教師もスクールカウンセラーにとっても、「百聞は一見にしかず」

のことわざどおり、アセスメントでの実物映写は、大きな威力を発揮します。

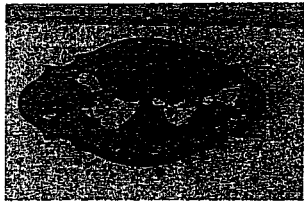
特に、生徒の個性や授業では見えなかった才能、長所、称賛に値するような点、あるいは問題解決の糸口などが必ず見えてきます。デジタルポートフォリオの作成準備と基本的な方針は、次のとおりです。

(A) 楠本拓矢氏のホームページから「TriAnImage2 Ver.3.75 日本語版 (<http://crmkw.bai.ne.jp/kusunaga>)」をダウンロードしてください。ダウンロードしたファイルをクリックすると解凍され、使用可能となります。

(B) 生徒の学習や制作物の記録は、主にスキャナーとデジタルカメラで行います。テストや課題など、紙ベースのものはスキャナーでスキャンして、画像ファイル化します。テストの場合は、往々にして点数だけに目を奪われましたが、解答過程に生徒の見方や考え方が表れます。取り込みます。技術家庭や美術などにおける制作物も、生徒の創造性やセンス、性格などを知るうえで重要です。これらは、立体的な物が多いので、デジタルカメラで撮影を行って、画像ファイルとして保存します。

(C) その他、教育的アセスメントで役立つ成績や出欠・遅刻情報などは、エクセルで記録を取って、データつきのグラフにして保存しておくとういと思っています。ハードディスクも大容量化しているので、動画や音声ファイルも記録できればよいでしょう。

図2 IrfanViewによるスライドショー表示例



④ 画像ファイルのプレゼンテーション
保存された画像ファイルを開観するときは、IrfanViewのスライドショーの機能を活用すると便利です。閲覧しようとするファイルを複数個指定して、スライドショーを作成すると、画像の自動・手動切替えによるスライドショーが行えます。

図2は、その実例です。もう一つの便利な機能は、出来上がったスライドショーの情報を、実行ファイルとして保存します。作成方法は、(フ

こうしておく、エクスプローラーなどのファイラーでファイルを表示させた場合、年別・教科等別に自動整理されます。なお、ファイル名は、すべて半角英数字で入力・表記してください。

ちよつとした操作なのですが、学校現場では教師の情報活用能力にバラつきがあるため、ファイル名のローマ字表記を嫌う風潮があります。そのため情報処理上の合理的操作に対して抵抗があったり、定着までに時間がかかります。この際、個人的なパソコンへの好悪や偏見は捨てて、チーム援助過程で合理化できる方法があれば、それを習得し、実践化できるようにするのがいいと思います。



ファイル)↓(スライドショー)を開いて、画像ファイルを指定して(追加)します。次に、[EXIF]ファイルで実行)↓(実行ファイルを作成)↓(ウィンドウモードで実行)を指定し、適当なファイル名をつけて保存します。たとえば、図1の2003_kaiji_06_13.exeのように保存します。

出来上がった実行ファイルをクリックするだけで、いつでも登録されたファイルによるスライドショーが行えます。教師が個人的に、パソコンの画面上で簡単に保存資料を確認・分析することができます。

また、学年会、生徒指導部会、チーム援助会議のときに使用するプレゼンテーション用資料も、きわめて短時間で作成することができます。

ノートパソコンと液晶プロジェクタがあれば、教育相談室のような比較的狭い部屋でも、映写しながらの検討会が行えます。

限られた人・時間・場所で、適切なアセスメントを行うには、現状ではこのような教師側の地道なデータの蓄積作業が重要だといえます。

■生徒指導講座HP
<http://www.edulyogo-u.ac.jp/shido/index.html>

■八並光俊HP
<http://www.edulyogo-u.ac.jp/shido/yatunami/index.html>

2 デジタルポートフォリオの作成方法

① フォルダの構成例

画像データを保存する場合に、下の図1のようなフォルダ構成にして、整理するとアセスメントを展開するうえで非常に役立ちます。外づけのハードディスクやDVDやCDに、生徒別のフォルダを作成します。図中の名前は、仮名です。

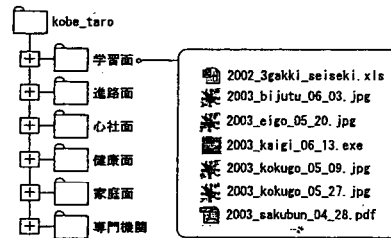
メインフォルダ名は、生徒名をローマ字表記したものにします。姓名の間は、後述のアンダースコアでつなぎます。サブフォルダは、学習面、進路面、心社(心理・社会)面、健康面、家庭面、専門機関などで構成されます。それぞれのフォルダに、日々の業務で得た生徒情報をとにかくデジタルカメラで撮影する、スキャナーでスキャンする。それを保存します。要は、生徒のありのままの姿(「事実」)を、蓄積することにあります。

② ファイルの保存形式

保存する情報としては、前述のように小テストや定期テストの解答用紙、作文、作品、行事で撮影した写真など多様です。基本的には、図1の学習面の四角枠内のファイル例に見られるように、一般的な画像形式JPEG形式で保存していきます。デジタルカメラ・スキャナーのいずれの場合も、極端に解像度を低くしないでください。実際に



図1 デジタルポートフォリオのフォルダ構造



プレビューをしてみて、文字の判読性や画像の視認性を確認して解像度を決定してください。確実に読める、見えるようにしておくのがポイントです。

③ ファイルの命名方法の工夫

デジタルポートフォリオが、アセスメント場面で威力を発揮するには、チーム援助会議でのプレゼンテーションを想定したファイル構成にしておく必要があります。具体的には、ファイルの命名方法は、

図1に見られるように、ファイルを保存する際に、「西暦年4けた十ローマ字表記の教科名等十月2けた十2けた十拡張子3文字」(「03」:「is」:「pt」等)としておきます。「十」部分の表記は、一般的なキーボードの右下端にあるひらがなの「ろ」のキーに割り当てられているアンダースコア(短い下線)を使用します。小文字の英数字入力状態で、シフトキーを押しながら「ろ」キーを押すと入力されます。

〈表1〉 チーム援助とアセスメントの位置づけ

援助	機能	対象	問題性	専門性	協働性	主な担当	援助の主な内容
一次的	開発的	全て	低	基礎的	学年協働型	学級担任 学年集団	ガイダンス 教育相談
二次的	予防的	一部	中	応用的	学内協働型	生徒指導部 学年チーム	教育相談 チーム援助
三次的	治療的	特定	高	専門的	学内外協働型	生徒指導部 援助チーム 諸専門機関	アセスメント 個別教育計画 チーム援助

学校現場で大切なのは、学年の初期段階で生徒の悩みや問題を早期発見し、予防・解決することです。

そのためには、学年当初での生徒指導を工夫し

2 効果的アセスメントの実施上の工夫

徒に対して、生徒指導部がリーダーシップを発揮し、学内の複数の教師・学外の専門機関の専門家と協働して、チーム援助を行います。その場合の生徒理解は、教師の教育的見地からだけでなく、心理臨床を含む専門的見地から、生徒の過去と現在の状態を精査する必要があります。

〈表2〉 学年当初の予防・早期発見・介入を想定したチーム援助までの流れ

リーダー	主な担当者 援助レベル	教師の活動および実践内容の具体例
学年会	学級担任 一次的援助	<ul style="list-style-type: none"> ● スクリーニングテスト・ガイダンス・定期教育相談の実施 ● 生徒・保護者の援助ニーズの客観的理解と共感的理解 ● デジタルポートフォリオの作成・更新・蓄積 ● 二次的援助・三次的援助対象生徒の早期発見と対応の協議
	学年チーム 二次的援助	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒指導部と連携した二次的援助対象生徒の生徒理解 ● 二次的援助のための具体的な問題解決方法の検討と共通理解 ● 早期解決に向けての学年協働体制の確立と問題解決実践 ● 三次的援助への移行を踏まえた援助情報の蓄積と整理
生徒指導部	援助チーム 三次的援助	<ul style="list-style-type: none"> ● 学年チームからの三次的援助要請と援助情報の共有 ● 生徒指導部を中心として、精緻なアセスメントの実施 ● 生徒指導部および生徒指導委員会での対象生徒の共通理解 ● 学内外のスタッフによる援助チームの編成と個別教育計画の作成 ● チーム援助実践およびチーム援助データベースによる生徒のモニタリング、チーム援助会議録の作成・蓄積

(八並光俊, 2003)

チームサポートの理論と実際

【第6回】

効果的なアセスメントの実施

兵庫教育大学大学院助教授
八並 光俊

1 チーム援助の基盤となるアセスメント

今回からチーム援助の実際の展開に沿って、各プロセスを説明したいと思います。第2回(5月号)で示したチーム援助プロセスモデルの第1段階、すなわちアセスメントについて述べます。アセスメントは、チーム援助における援助目標の設定や個別教育計画の策定の基盤となる専門的かつ精緻な生徒理解だといえます。今後、特別支援教育を視野に入れた生徒指導を想定すると、アセスメントがチーム援助の効果に大きく影響していくことは必至です。

アセスメントの実施についてお話しする前に、第1回で取り上げた学校心理学の視点から、生徒指導におけるアセスメントの位置づけをおさめよう。生徒指導の援助段階を、A表ⅠVのように整理してみました。

一次的援助では、学年をベースに、学級担任が中心となって、ガイダンス(自己理解・対人関係スキル・暴力予防・学習スキル・進路発達など)に関する計画的な集団指導や定期教育相談を行います。二次的援助は、顕在化しはじめた問題行動を、生徒指導部と連携しながら学年集団がチーム(学年チーム)となって解決にあたります。学年チームで援助を行う前に、十分な生徒理解を行います。教師に求められる生徒指導の力は、生徒の早期の問題解決に向けての応用的な知識やスキルと援助経験です。また、スクールカウンセラーが配置されている学校では、スクールカウンセラーのカウンセリングやコンサルテーションによる後方支援を受けます。二次的援助に期待した効果が見られない場合、三次的援助へと移行します。

三次的援助では、教師の援助性を越える暴力・性非行・不登校・LD・ADHDなどの特別な援助ニーズをもつ生

<図1> アセスメントシートの基本フォーマット

アセスメントシート		SN	日時	場所	作成者
出席者	学内		学外		
生徒基本情報	氏名	保護者名	家族構成の概要		
	所属	前年所属	父親・母親		
	担任	前年担任	きょうだい		
	SC	前年SC	祖父母・他		
	住所		TEL. FAX	指導要録	1 2 3
心理教育的査定	学習面		1 2 3 4 5	6 7 8 9 10	
	心理社会面		1 2 3 4 5	6 7 8 9 10	
	進路面		1 2 3 4 5	6 7 8 9 10	
	健康面		1 2 3 4 5	6 7 8 9 10	
医学的査定	医療機関名	診断日	診断名	担当機関のコメント	診断書
					有 無
環境的査定	学校環境	物的条件		1 2 3	
		人的条件		1 2 3	
	家庭環境	物的条件		1 2 3	
		人的条件		1 2 3	
	地域環境	物的条件		1 2 3	
		人的条件		1 2 3	
連携情報	連携機関名	担当者名	連携機関のコメント及び助言		
			1 2 3		
			1 2 3		
補足情報	補足事項	補足情報の内容			
			1 2 3		
			1 2 3		

(八並光俊, 2003)

3 アセスメントシートの活用

アセスメントシートを活用した二次的援助のアセスメントについて、簡単に述べます。アセスメントでは、生徒指導部が中心となって、学年の生徒指導担当、学級担任、教師らが行うことができます。

前者は、学校で実施する独自調査や標準化された心理検査です。たとえば、私の研究では、大阪心理出版の「教育相談のための総合調査Ⅱ」を使用しています。これによって、学年当初に個々の生徒の状態を客観的に理解します。この時点で、二次的援助・三次的援助が必要な生徒がある程度特定されます。後者の定期教育相談によって、生徒の共感的理解を図ります。これによって、さらに生徒の特定化が促進されます。生徒の自発性に任せたい予約相談では、往々にして後手に回る可能性があります。先手型の生徒指導を学年当初から、組織的・計画的に実施することで、二次的援助や三次的援助の問題解決効果を高めます。同時に、二次的援助でのアセスメントを、生徒理解情報ゼロから始めるのではなく、一定期間蓄積された生徒理解情報を活用しながら行うことができます。



- ① 生徒の基本情報→生徒の当該年度と前年度の所属や担任等の情報、家族や指導についての情報
 - ② 心理教育的査定→生徒の学習面、心理社会面、進路面、健康面に関する援助情報、観察・成果情報
 - ③ 医学的査定→医療機関でのケアに関する情報
 - ④ 環境的査定→学校・家庭・地域の物的環境条件に関する情報や人的な環境条件に関する情報
 - ⑤ 連携情報→適応指導教室、警察、児童相談所などの連携機関の情報
 - ⑥ 補足情報→右記以外で参考となる補足的情報
- このアセスメントシートは、アドビ社のアcroバットでpdfファイルに変換してデジタル化します。シート中の数字欄で、前回お話ししたデジタルポートフォリオに蓄積した情報とリンクを張って、視覚的に生徒理解を深めます。アセスメントシートの活用例は、次回お話ししたいと思います。
- 八並光俊HP
<http://www.eduhyo-u.ac.jp/shido/atunani/index.html>